

「ギールケ文庫は、どのくらい読まれているのか？」
—— センター教授就任にあたって ——

“How Often Is the Otto Friedrich von Gierke Collection Used ?” :
As the Newly Appointed Professor of the CHSSL

屋敷 二郎

ALBERTUS YASHIKI JIRO REI

書物は、読まれるためにある。読まれるためには、まずそこに書物があることが読み手に知られねばならない。だから私は、短期・長期を問わず国外の研究者を受け入れる機会のあるたびに、社会科学古典資料センターを案内することになっている。その際、ほとんどの訪問者は、センターの蔵書に礼儀正しく感嘆してみせる（実際に感嘆しているのかも知れない）。しかし、すべての訪問者が「礼儀正しい」とは限らない。私が忘れられないのは、あるドイツ人研究者が漏らした一言である。

「ギールケ文庫は、どのくらい読まれているのか？」

もちろん、ギールケ文庫を構成する資料の一部は、正真正銘の貴重書である。これらの貴重書は、世界的に見てもほとんど、あるいは全く代わりがきかない人類の知的遺産であって、所蔵館には将来の読み手のために万全の状態で保存し続ける責務がある。この点について、センターはこれまで十二分に務めを果たしてきただけでなく、その過程で蓄積されたスキルやノウハウを全国の図書館に向けて普及させる努力を続けてきた。とはいえ、センターが所蔵する古典資料はあくまでも社会科学研究のための「資料」であって、博物館に陳列する収蔵品ではないのだから、潜在的な現代の読み手を全世界から掘り起こしていくために何ができるか、何をすべきかをもっと考えねばならないだろう。

また、ギールケ文庫を構成する資料の大半については、ギールケその人の蔵書であった、という一点を除けばそもそも「貴重書」ではない。実際ドイツの諸大学では、それらのタイトルは普通に開架図書として扱われ、学部学生はもちろん学外者でも自由に手に取ることができ、コピーやスキャンも閲覧者に任されている。これらの書物については、ごく普通の学部学生が、せっかくドイツ語を選択したのだし話のネタに1冊くらい読んでみようかな、という程度のノリでふらっとセンターに来ても構わないはずだと思うし、そう仕向けていくような工夫ができないものか、とも思う。